

原始仏典の表現法

— vyañjanapada · atthapada —

片 山 一 良

I

教説をいかに正しく表現し、聞く人々にどれだけ正確に理解させうるか、これはどの宗教にも共通な最も注意の払われねばならぬ問題である。仏教においても然り、仏とか涅槃とかいった語に夥しい数の別名が挙げられていることや、四諦、縁起などの語句が聖典の随所に見られること、そして又、あの冗慢な文章のくり返しはそれを如実に物語るものであろう。仏教の存続に関わる重要な課題として、このことが仏教当初より意識されていたであろうことは、しかも文字に頼りうる今日とは異り、ひたすら口伝によった当時においてはその表現の方法が極めて重要な意味を持っていたであろうことは、我々の想像にも難くない。仏陀が法をどのように説示されたか、そして仏弟子たちがそれをどう捉え、かつどのように伝えていったのか。

これについて考える時、我々は何よりもまず、本来仏陀の説法を仏弟子がまとめた梗概要領に外から与えた文学形式であると推定される九分十二分教、及びパーリヤーヤに思いをめぐらすであろう。これらが説法の最も代表的な表現形式である限り、それは理の当然である。ところが、こうした形式にむろん関わってはいないものの、別個に考えられうるものがある。それは、「解釈の仕方」と呼ぶべきものである。換言すれば「分別の方法」である。更に言うならば、略説から広説に到る迄の分別の仕方を指す、いわば次第説法の言語形式に外ならぬ。

そもそも、言語には相補的な二面が認められる。即ち規範的 (normative) 側面と文脈的 (contextual) 側面とである。それは構造的 (structural) 要素と機能的 (functional) 要素というようにも言い換えうるであろう。前者は「どのような言葉を用い〔てい〕るか」を、後者は「どのように言葉を用い〔てい〕るか」を問題とする。聖典語としてのパーリ語について言うと、例えば前者を扱ったものに *Kaccāyanapakaraṇa* を初めとする文法書、及び *Abhidhanappadīpikā* などの辞書が挙げられ、後者には *Nettipakaraṇa*, *Peṭakopadesa* といった聖典解釈指南とも言うべき書³⁾が挙げられよう。いずれも一般に三蔵として含まれない、それ以後の作品である。

本稿はそうした言語の側面のうち、後者の文脈的・機能的な面に目を向け、原始仏教聖典、即ちパーリ仏典における語法、言葉の在り方に言及しようとするものである。それはとりもなおさず「分別の方法」を明らかにするものに外ならぬ

い。

では、ここに言う「語法」とか「言葉の在り方」とは一体何を意味するものであるのか。これについて十二世紀にビルマで著わされた文法書『サッダニーティ』⁴⁾は次のように説明している。

「ここに聖典法 (Pāli-naya), 註釈法 (aṭṭhakathā-n°), 復註釈法 (ṭikā-n°), 他書法 (pakaraṇantara-n°) という四方法が意味される。そのうち、聖典法とは三蔵の仏語 (buddhavacana) における聖典の在り方 (Pāli-gati) である。註釈法とは諸註釈においてとられた言葉の在り方 (saddagati) である。復註釈法とは諸復註釈においてとられた言葉の在り方である。他書法とはその他の諸書においてとられた言葉の在り方である」

つまり、パーリ語文献はここに述べられているように成立年代から四分類されるが、その各々にそれぞれの語法 (saddagati) がある、どのような語をもってどのように説明するかという表現法 (naya) があるというのである。ここではそのうちの聖典法 (Pāli-naya) について検討するものであるが、その表現法とは具体的には何を意味するものであるのか。蔵外の經典にはこれに関する若干の記述を見出しうるが、今は再び『サッダニーティ』⁵⁾を引いて示すことにしよう。

「ここに字 (akkhara), 語 (pada), 文 (vyañjana), 様相 (ākāra), 語源 (nirutti), 細説 (niddeśa) という六形式語 (cha-vyañjanapada)⁶⁾があり、略言 (saṅkāsānā), 表明 (pakāsānā), 解明 (vivarāṇa), 分別 (vibhajana), 闡明 (uttānikarāṇa), 施設 (paññatti) という六内容語 (cha-atthapada)⁶⁾がある」

これらは聖典に見られる表現の形式 (vyañjana) と内容 (attha) とを示している。各々の言葉がいかなる意味をもつものであるか、そして又、その形式語と内容語とがどのように関わり合うものであるか、以下においてこれらを考察し、聖典における表現上の特殊性を明らかにしたいと思う。

II

さて、六形式語、六内容語について、語そのものは *Nett.*, *Peṭ.* をはじめ、諸註釈にもいくつも見うけられるところであるが、個々の説明は殆んどなされてない。したがって、その各々について解説を施す上記の『サッダニーティ』⁷⁾によってこれを窺うことにしたい。

akkhara “字”⁸⁾

rūpaṃ aniccaṃ ti vuccamāno ruṇṇaṃ ti opāṭeti “ルーパン・アニッチャン (色は無常である) と言うところを、ルーで止める” (*Vin.* IV. 15) という言葉からいって、意味を表わす語の終りが失われた字それぞれが「字」とであると解すべきである。

或いは *yo pubbe karaṇīyāni*. “前に為すべきことなどを……ものは” (*J.* I. 319) とか、*so imaṃ vijāṭaye jaṭiṃ* “彼はこの結縛を解くべきである” (*S.* I. 13) など

における yo とか so のように、意味を表わす一音節語が「字」であると解すべきである。

更にまた, *saṭṭhi vassasahassāni* “六万年に亘って” (*Pv.* 67 [v. 794^a]) と言おうとして述べられた最初の sa- 字のように、不完全な (*aparisaṃmatta*) 語 (*pada*) における音 (*vaṇṇa*) が「字」であると解されねばならない。

pada “語”¹⁰⁾

「愛欲を離れ、執着なく、詞・語を熟知し、字の集合と〔字の〕前後を知るならば」(*vītaṅṅho anādāno niruttipadakovidō akkharānaṃ sannipātaṃ jaññā pubbāparāni ca. Dhṭp.* 352^{a-d}) というように、格語尾 (*vibhatti*) で終り、意味を表わす字の集合 (*akkharapaṇḍa*) が「語」である。例えば *sīle patiṭṭhāya*. “戒をよく守り” (*S. I.* 13) という場合の *sīle* という語のように。

vyañjana “文”¹¹⁾

意味がつながったもので、部分が完結している語の集合 (*padasamūha*) が「文」である。¹³⁾ 例えば、

「比丘たちよ、これらが四念住である」(*cattāro 'me bhikkhave satipaṭṭhānā. Paṭis.* II. 232)

などのように。

ākāra “様相”¹⁴⁾

文 (*vyañjana*) の区分 (*vibhāga*), 分類 (*vibhāgapakāra*) が「様相」である。例えば、

「四とは何か。即ち、比丘たちよ、ここに比丘は身体において身体を觀察して住している」(*katame cattāro: idha bhikkhave bhikkhu kāye kāyānupassī viharati. Paṭis.* II. 232)

などのように。

nirutti “語源”¹⁵⁾

様相 (*ākāra*) の説明を解説 (*nibbacana*) したものが「語源」である。¹⁶⁾ 例えば、

「比丘たちよ、現行するから行である」(*abhisankharotī ti kho bhikkhave tasmā saṅkhārā. S.* III. 87)

「感受するから受である」(*vedayati ti vedanā. Vism.* 460), 「触れるから触である」(*phusatī ti phasso. Vism.* 463)

などのように。

niddesa “細説”¹⁷⁾

解説 (*nibbacana*) の内容を広く、残り無く説明したものが「細説」である。例えば、

「楽受、苦受、非苦非楽受は」(*sukhā vedanā dukkhā vedanā adukkhamasukhā vedanā. Dhs.* 1)

「楽しむから樂の、苦しむから苦の、苦しむことも楽しむこともないから非苦非樂の受である」(sukhayatī ti sukhā, dukkhayatī ti dukkhā, n'eva dukkhayatī na sukhayatī ti adukkhamasukhā vedanā. *Sadd.* 907²⁴⁻²⁶ cf. *As.* 41)

などのように。

以上が六形式語と言われるものである。

III

次に六内容語について述べよう。

saṅkāsanā “略言”¹⁸⁾

簡略 (saṅkhepa) による説明 (kāsanā) が「略言」であり、この場合の説明 (kāsanā) とは、説き明かすこと (dīpanā) であって、「簡略な意味の説き明かし」ということである。¹⁹⁾ 例えば

「比丘よ、執着する者は魔に縛られ、執着を離れる者は波旬から解き放たれる」(upādiyamāno kho bhikkhu baddho Mārassa anupādiyamāno mutto pāpimato. *S.* III. 73)²⁰⁾

などというように。

pakāsanā “表明”²¹⁾

最初 (paṭhama) の説明 (kāsaṇa) が「表明」であり、「後で語らるべき意味のすべてを、最初の言葉 (vacana) でもって説き明かす」ということである。²²⁾ 例えば、

「比丘たちよ、すべては焼き尽くされた」(sabbaṃ bhikkhave ādittaṃ. *S.* N. 19, *Vin.* I. 34, *Kv.* 209)

などのように。

vivarāṇa “解明”²³⁾

略言 (saṅkāsanā) と表明 (pakāsanā) とによって説き明かされた内容を更に詳しく再説して開示すること (pākāṭakaraṇa) が「解明」と言われる。例えば、

「『比丘たちよ、すべては焼き尽くされた』とは何か。即ち、比丘たちよ、眼は焼き尽くされ、諸色は焼き尽くされた」(kiñ ca bhikkhave sabbaṃ ādittaṃ: cakkhum bhikkhave ādittaṃ rūpā ādittā. *S.* N. 19, *Vin.* I. 34)

などのように。

vibhajana “分別”²⁴⁾

多くの状態 (bhāva) から、開示さるべき智慧を現前させること (buddhisam-mukhākaraṇa) が「分別」と言われる。例えば、

「比丘たちよ、色とは何か。即ち四大種と四大種所造の色とである」(katañ ca bhikkhave rūpaṃ: cattāro ca mahābhūtā catunnañ ca mahābhūtānaṃ

upādāya rūpaṃ. S. III. 59)

とか、或いはまた、

「何によって焼き尽くされたのか。即ち、食欲の火によって、瞋恚の火によって、愚癡の火によって、生によって、老によって、死によって、憂によって、悲によって、苦によって、惱によって、絶望によって焼き尽くされたのである。」(kena ādittaṃ : rāgagginā dosagginā mohagginā jātiyā jarāya maraṇena sokehi paridevehi dukkhehi domanassehi upāyāsehi ādittaṃ. S. IV. 19, Vin. I. 34)

などのように。

uttānikaraṇa “²⁵⁾闡明”

分別された内容を詳説 (vitthāraṇa) し、比喩 (upamā) を連ねて納得させること (sampaṭipādana) が「闡明」と言われる。例えば、

「そのうち四大種とは何か。即ち地界、水界である」(tattha katame cattāro mahābhūtā : pathaviḍhātu āpodhātu. Sadd. 908)

とか、或いは又、

「比丘たちよ、たとえば川が山間をゆっくり、くねり、急速に流れているとしよう。たとえその兩岸にカーサ草が生えていたとしても、それらは流れになびいてしまうであろう。たとえクサ草が生えていても、それらは流れになびいてしまうであろう。たとえバッバジャ草が生えていても、それらは流れになびいてしまうであろう。たとえピーラナ草が生えていても、それらは流れになびいてしまうであろう。たとえ木が生えていても、それらは流れになびいてしまうであろう。

その流れにかの人が流されている時、たとえカーサ草をつかんだとしてもそれらは折れてしまうであろう。彼はそのために禍、不幸に陥るのだ。たとえクサ草をつかまえても、たとえバッバジャ草をつかまえても、たとえピーラナ草をつかまえても、たとえ木をつかまえてもそれらは折れてしまうであろう。彼はそのために禍、不幸に陥るのだ。比丘たちよ、このように無聞の凡夫は聖人を見ず、聖人の法を熟知せず、聖人の法に従わず、善知識を見ず、善知識の法を熟知せず、善知識の法に従わず、色は自分であり、自分は色をもっており、色の中に自分があり、自分の中に色があると見なすのである。そして彼はその色を壊し、そのために禍、不幸に陥る。

受……想……行……

識は自分であり、自分は識をもっており、自分の中に識があり、識の中に自分があると見なすのである。そして彼はその識を壊し、それがため、禍、不幸に陥る」(seyyathā pi bhikkhave nadī pabbateyyā ohāriṇī dūraṅgamā sīghasotā. tassa ubhosu tīresu kāsā ce pi jātā assu, te nam ajjholambeyyūṃ.

kusā ce pi jātā assu, te nam ajjholambeyyurū. babbajā ce pi jātā assu, te nam ajjholambeyyurū. bīraṇā ce pi jātā assu, te nam ajjholambeyyurū. rukkhā ce pi jātā assu, te nam ajjholambeyyurū. tassā puriso sotena vuyhamāno kāse ce pi gaṇheyya te palujjeyyurū. so tato nidānaṃ anayavyasanaṃ āpajjeyya. kuse ce pi gaṇheyya, babbaje ce pi gaṇheyya, bīraṇe ce pi gaṇheyya, rukkhe ce pi gaṇheyya, te palujjeyyurū. so tato nidānaṃ anayavyasanaṃ āpajjeyya.

evam eva kho bhikkhave assutvā puthujjano ariyānaṃ adassāvī ariyadhammassa akovido ariyadhamme avinīto sappurisānaṃ adassāvī sappurisaḍḍhammassa akovido sappurisaḍḍhamme avinīto rūpam attato samanupassati. rūpavantaṃ vā attānaṃ attani vā rūpaṃ rūpasmiṃ vā attānaṃ. tassa taṃ rūpaṃ palujjati, so tato nidānaṃ anayavyasanaṃ āpajjati. vedanaṃ. saññaṃ. saṅkhāre. viññāṇaṃ attato samanupassati. viññāṇavantaṃ vā attānaṃ attani vā viññāṇaṃ viññāṇasmiṃ vā attānaṃ. tasmīṃ taṃ viññāṇaṃ palujjati. so tato nidānaṃ anayavyasanaṃ āpajjati. S. III. 137-138)

などのように。

paññatti “²⁶⁾施設”

種類 (pakāra) による宣言 (ñatti) が「施設」である。種々の分類によって聞く人々を満足させ、鋭い智慧の働きによって内容を理解させることをいう。例えば、

「ラーフラよ、およそ内身にそれぞれ粗にして堅く具えられたもの、即ち髪、毛、爪、齒、皮、肉、筋、骨、髓、腎臟、心臟、肝臟、肋膜、脾臟、肺、腸、腸間膜、胃、大便のようなもの、或いは又、その他に内身にそれぞれ粗にして堅く具えられたもの、ラーフラよ、これが内地界と言われる。この内地界と外地界とが地界である。そこで『それは私のものではない、私はそれではない、私にはかの自己というものはない』と、このようにそれが如実に正しい智慧をもって見られねばならない。こうしてそれを如実に正しい智慧をもって見て、地界を厭離し、地界から心を離れさせるのである」(yaṃ kiñci Rāhula rūpaṃ ajjhataṃ paccattaṃ kakkhaḷaṃ kharigataṃ upādinnaṃ seyyathīdaṃ kesā lomā nakhā dantā taco maṃsaṃ nhāru aṭṭhī aṭṭhimiñjaṃ vakkāṃ hadayaṃ yakanāṃ kilomakāṃ pihakāṃ papphāsaṃ antaṃ antaḡuṇaṃ udariyaṃ karīsaṃ yaṃ vā paṇ' aññaṃ pi ajjhataṃ paccattaṃ kakkhaḷaṃ kharigataṃ upādinnaṃ, ayaṃ vuccati Rāhula ajjhataṃ pathavīdhātu, yā c'eva kho ajjhataṃ pathavīdhātu yā ca bāhirā pathavīdhātu-eva esā n'etaṃ mama n'eso 'ham asmi na me so attā ti evam etaṃ yathābhūtaṃ

sammappaññāya daṭṭhabbaṃ, evaṃ etaṃ yathābhūtaṃ sammappaññāya disvā pathavīdhātuyā nibbindati pathavīdhātuyā cittaṃ virājeti. *M. I.* 421-422)

とか、或いは又、

「このうち何が過去の色であるのか。色がすでに過ぎ去り、滅し、離れ、変化し、没し、滅没し、生じて離れ、過去の過去分に摂められた四大種と四大種所造色、これが過去の色と言われる。

このうち何が未来の色であるのか。色が未だ生せず、存在せず、等生せず、起らず、現起せず、現われず、出生せず、等出生せず、生起せず、等生起せず、未来の未来分に摂められた四大種と四大種所造色、これが未来の色と言われる。

このうち何が現在の色であるのか。色がすでに生じ、存在し、等生し、起り、現起し、現われ、出生し、等出生し、生起し、等生起し、現在の現在分に摂められた四大種と四大種所造色、これが現在の色と言われる」 (tatha katamaṃ rūpaṃ atītaṃ : yaṃ rūpaṃ atītaṃ niruddhaṃ vipariṇataṃ attha-gataṃ abbatthagataṃ uppajjitvā vigataṃ atītaṃ atītaṃsena saṅgahītaṃ, cattāro ca mahābhūtā catunnaṃ ca mahābhūtānaṃ upādāya rūpaṃ, idaṃ vuccati rūpaṃ atītaṃ. tattha katamaṃ rūpaṃ anāgataṃ ; yaṃ rūpaṃ ajātā abhūtaṃ asañjātaṃ anibbattaṃ anabhinibbattaṃ apātubhūtaṃ anuppannaṃ asamuppannaṃ anuṭṭhitaṃ asamuṭṭhitaṃ, anāgataṃ anāgataṃsena saṅgahītaṃ, cattāro ca mahābhūtā catunnaṃ ca mahābhūtānaṃ upādāya rūpaṃ, idaṃ vuccati rūpaṃ anāgataṃ. tattha katamaṃ rūpaṃ paccuppannaṃ : yaṃ rūpaṃ jātaṃ bhūtaṃ sañjātaṃ nibbattaṃ abhinibbattaṃ pātubhūtaṃ uppannaṃ samuppannaṃ uṭṭhitaṃ samuṭṭhitaṃ, paccuppannaṃ paccuppannaṃsena saṅgahītaṃ, cattāro ca mahābhūtā catunnaṃ ca mahābhūtānaṃ upādāya rūpaṃ, idaṃ vuccati rūpaṃ paccuppannaṃ. *Vibh.* 1-2)

などのように。

以上が六内容語の概要である。

IV

さて、これ迄の説明から各語の意味は大凡明らかとなるが、次にこれら六形式語と六内容語とが一体どのように関わり合うものであるのかを見てみよう。²⁷⁾ *Nett.* によれば両者の各々の関係は次のように説明される。

「ここに世尊は字 (akkhara) をもって略言され (saṅkāseti), 語 (pada) をもって表明され (saṅkāsayati), 文 (byañjana) をもって解明され (vivarati), 様相 (ākāra) をもって分別され (vibhajati), 語源 (nirutti) をもっ

て闡明され (uttānikaroti), 細説 (niddeśa) をもって施設された (paññāpāyati)。

ここに世尊は字と語とをもつて略説され (ugghaṭeti), 文と様相とをもつて広説され (vipañcayati), 語源と細説とをもつて詳説された (vitthāreti)。

ここに, 略説 (ugghaṭanā) は初め (ādi) であり, 広説 (vipañcanā) は中間 (majjha) であり, 詳説 (vitthāraṇā) は終り (pariyosāna) である。

かの法と律 (dhammavinaya) が, 略説されて略説知者 (ugghaṭitaññupuggala) を教導する時, それは初めの善巧 (ādikalyāṇa) といわれる。広説されて広説知者 (vipañcitaññupuggala) を教導する時, それは中間の善巧 (majjhek°) といわれる。詳説されて所引導者 (neyyapuggala) を教導する時, それは終りの善巧 (pariyosāna-k°) といわれる。」

これによって我々は両者の対応関係をかなり具体的に知りうるが, では, 全体的な関係についてはどうか。『サッダニーティ』は, これを以下のように説明して言う。

「ここに, 何が形式の六法 (vyañjanachakka) であり, 何が内容の六法 (atthachakka) であるのか。即ち仏世尊の法を教示する者にとって, 内容を理解する原因 (atthāvagamahetu) となる表示語 (saviññattikasadda) が形式の六法であり, それによって理解さるべき相 (lakkhaṇa), 味 (rasa) 等をそなえた法 (dhamma) が内容の六法であると知るべきである」

今, この両記述に基づいて知られる形式語, 内容語の関係を表に示すと次の通りである。

PĀLI - NAYA

<u>vyañjana-pada</u> (形式語)	<u>attha-pada</u> (内容語)
akkhara (字)	… saṅkāsana (略言)
pada (語)	……………ugghaṭanā(略説) = ādi(初め)
	… pakāsana (表明)
vyañjana (文)	… vivāraṇa (解明)
ākāra (様相)	……………vipañcanā(広説) = majjhima(中間)
	… vibhajana (分別)
nirutti (語源)	… uttānikaraṇa(闡明)
niddeśa (細説)	……………vitthāraṇā(詳説) = Pariyosāna
	… paññatti (施設) (終り)

以上から, 我々は, akkhara 乃至 niddeśa が簡単から詳細に至る言葉の構成単位としての表現の形式, 手段であり, これに対し saṅkāsana 乃至 paññatti がそのそれぞれに対応する言葉の機能単位としての表現の内容, 結果を示すものであ

ることを知る。即ち、法を説く場合、初めに「字」或いは「語」を以って簡略に凝縮して説くが、これが難解で理解出来ない場合、次は「文」或いは「様相」を以って分かり易く説き、それでも尚、理解出来ない場合、最後の手段として「語源」或いは「細説」によって詳しく法の内容を説明するという、その表現における形式の略→細、内容の難→易を表わしたものに外ならぬことを知るのである。しかし同時にここには相当のところ迄組織された表現法というものを感じないではおれない。いわば、出来すぎているのである。こうした所説の根拠がどこに置かれているのか、これについて我々は考えてみる必要がある。形式、内容という二区分、その各々に立てた六区分、そして又、その六区分を三分にまとめたということについてである。

まず、*Nett.* には前掲部分に引続き、次のような引用がなされている。

「それ故に世尊は説かれたのである。『比丘たちよ、私はそなたたちの為に、初めもよく、中間もよく、終りもよい、内容もそなわり、形式もそなわった、完全無欠の清浄な法を示すことにしよう』と」(tenāha bhagavā : dhammaṃ vo bhikkhave desissāmi ādikalyāṇaṃ majjhe kalyāṇaṃ pariyosānakalyāṇaṃ sātthaṃ sabyañjanaṃ, kevalaṃ paripuṇṇaṃ parisuddhaṃ ti. *Nett.* 8)

即ち、これによって sāttha, sabyañjana²⁹⁾ という大きな枠組、及び ādi, majjha, pariyosāna³⁰⁾ という区分が、「仏によって説かれた」この一文に基づくものであることがわかる。そして又、これが引用されている経典のうち『中部経典』の「六六経」(M. III. 280. Chachakkasutta)³¹⁾ には上記に続いて「即ちこれは六六である。これを聞くがよい。……六内処を知るべきである。六外処を知るべきである。……」という記述がある。これも sāttha, sabyañjana に六項を立てたことと無関係ではない。両者の対応関係からいって六法の考え方の基礎がここにあるのではないかと予想されるのである。

こうしたことについて更に詳しく考察すべく、以下では仏典全体における「表現」の扱いというものを具体例を示しつつ窺うことにしたい。

V

まず、表現の「形式」及び「内容」という二項が仏典ではいかに捉えられているかであるが、原始仏典では教説の正しい理解を目指し、あまねくその調和が強調されていると言ってよい。例えば次の通りである。

「それ故チュンダよ、ここに私によって遍知された法がそなたたちに説かれたのである。ここにすべての者は共に来、共に集り、意味をもって意味を、文をもって文を宣説するため、等誦するために諍うべきではない。即ちこの梵行が永続し、久住することは多くの人々の利益、多くの人々の安樂、世間への慈愍、諸の天と人との利益と安樂とのためである」(tasmāt iha Cunda

ye vo mayā dhammā abhiññā desitā, tattha sabbeh' eva saṅgama samāgama atthena atthaṃ vyañjana vyañjanaṃ saṅgāyitabbaṃ na vivaditabbaṃ, yathayidaṃ brahmacariyaṃ addhaniyaṃ assa ciraṭṭhikaṃ, tad assa bahujana-hitāya bahujana-sukhāya lokānukampāya atthāya hitāya sukhāya devamanussaṇaṃ. *D. III. 127*)

「もし今、そなたたちが、『この尊者たちは意味において異説をとなえ、又、文においても異説をとなえている』と思うなら、その場合、より柔順であると思われる比丘の許へ行き、『尊者たちは意味において異説をとなえ、又、文においても異説をとなえておりますが、どのように意味に異説があり、文に異説があるかを知るのでしょうか。尊者は諍ってはなりません。』と言うがよい」 (*tatra ce tumhākaṃ evaṃ assa: imesaṃ kho āyasmantānaṃ atthato c'eva nānaṃ byañjanato ca nānaṃ ti; tattha yaṃ bhikkhuṃ suvacataraṃ maññeyyātha, so upasaṅkamtivā evaṃ assa vacaṇīyo: āyasmantānaṃ kho atthato c'eva nānaṃ byañjanato ca nānaṃ, tad aminā p'etaṃ āyasmanto jānātha, yathā atthato c'eva nānaṃ byañjanato ca nānaṃ; mā āyasmānto vivādaṃ āpajjitthāti. M. II. 239*)

「長者よ、この無量心解脱と、大心解脱とのこの法は、意味も異り文も異っているのだ」 (*yā cāyaṃ, gahapati, appamaññā cetovimutti yā ca mahaggaṭā cetovimutti, ime dhammā nānaṭṭhā c'eva nānābyañjanā ca. M. III. 146*)

「比丘たちよ、次の二法は正法を住せしめ、乱れさせず、滅没させることはない。その二とは何か。即ち正しく使用された文句と正しく理解された意味とである。」 (*dve me bhikkhave dhammā saddhammassa ṭhitiyā asammasāya anantaradhānāya samvattanti. katame dve. sunikkhittaṃ ca padavyañjanaṃ attho ca sunīto. A. I. 59, cf. II. 148*)

「比丘たちよ、次のような四論師がいる。その四人とは何か。比丘たちよ、意味を尽くし文を尽くさぬ論師、文を尽くし意味を尽くさぬ論師、意味と文とを共に尽くす論師、意味と文とを共に尽くさぬ論師である」 (*cattāro 'me bhikkhave vādī. katame cattāro. atthi bhikkhave vādī atthato pariyādānaṃ gacchati no vyañjanato. atthi bhikkhave vādī vyañjanato pariyādānaṃ gacchati no atthato. atthi bhikkhave vādī atthato ca vyañjanato ca pariyādānaṃ gacchati. atthi bhikkhave vādī n'ev' atthato no vyañjanato pariyādānaṃ gacchati. A. II. 138~139*)

「〔五法を成就した長老比丘は〕……戒を具し、パーティモッカ律儀を守り、軌則と行処とを円満し、少しの罪にも怖を見、戒法を受学する。多聞にして聞をもち、聞を積集し、初めもよく、中間もよく、終りもよい、内容もそなわり、形式もそなわった、完全無欠の清浄な梵行を説く、そのような法を彼

は多く聞き、持ち、語に熟練し、意をもって随観し、見をもってよく洞察する。語は美しく、話良く、優雅で信頼すべき、過失が漏れず、よく意味を伝える語を成就する。……」(silavā hoti, pātimokkhasaṃvarasaṃvuto viharati ācāragocarasaṃpanno, anumattesu vajjesu bhayadassāvī, samādāya sikkhati sikkhāpadesu; bahussuto hoti sutadharo sutasannicayo, ye te dhammā ādikalyāṇā majjhe kalyāṇā pariyosānakalyāṇā sāttham savyañjanam kevala-paripuṇṇam parisuddham brahmacariyam abhivadanti, tathārūpassa dhammā bahussutā hoti dhatā vacasā paricitā manasānupekkhitā diṭṭhiyā suppaṭividdhā; kalyāṇavāco hoti kalyāṇavākkaraṇo, poriyā vācāya samannāgato vissaṭṭhāya anelagaḷāya atthassa viññāpaniyā. ... A. III. 113~114)

「友よ、世の中に、甚深なる意味語を智慧で徹見する人は実に得難く、稀有である」(acchariyā h'ete āvuso puggalā dullabhā lokasmiṃ, ye gambhīram atthapadam paññāya ativijjha passanti. A. III. 356)

「前後を知り、意味を知り、語句に熟通する者は正しく法をとらえ意味を考察する」(pubbāparaññū niruttipadakovidō, suggahītañ ca gaṇhāti atthañ copaparikkhati. *Thag.* 1028)

「〔議論の審判者はそなたの〕所説が意味をはなれているとって意味の上から〔議論の〕敗北を宣告し、そなたの所説が文を離れているとって文の上から敗北を宣告する」(atthāpagataṃ bhaṇitan ti atthato apaharanti, byañjanāpagataṃ bhaṇitan ti byañjanato apaharanti. *Nid* I. 164)

このように原始仏典ではその教説が常により良き「形式」と「内容」とにおいて、又、それに照らして理解されねばならなかったことは明白である。しかしその両者の具体的内容となるとそれ程明確には打ち出されてはいない。今しばらく「六形式語」に関する例を探ることにしよう。

「尊師よ、私どもに実に次のような思いがありました。『……大カッチャーナ尊者はこの世尊によって略説され、詳しく分別されなかった内容を詳しく分別するのに適しておられる。……』と。……尊師よ、大カッチャーナ尊者は私どものために、これらの様相により、これらの語により、これらの文によって内容を分別して下さいました」(tesaṃ no bhante amhākaṃ etad ahoṣi:pahoti c'āyasmā Mahākaccāno imassa bhagavatā saṅkhittena uddesassa uddiṭṭhassa vitthārena attham avibhattassa vitthārena attham vibhajitum.tesaṃ no bhante āyasmatā Mahākaccānena imehi ākārehi imehi padehi imehi byañjanehi attho vibhatto. *M.* I. 114. cf. *S.* IV. 97, *A.* V. 229 etc.)

これによって我々は、pada, byañjana, ākāra をもって略説が広分別されることを知る。又、次のような文がある。

「友よ、希有である。友よ、未曾有のことだ。アーナンダ尊者がこのように善説したとは。この五法を成就したアーナンダ尊者のことを我々は、『具寿アーナンダは意味に巧みであり、法に巧みであり、文に巧みであり、語源に巧みであり、前後に巧みである』とよく覚えておこう」(acchariyam āvuso abbhutam āvuso, yāva subhāsitañ c’idaṃ āyasmataṃ Ānandena, imehi ca mayam pañcali dhammehi samannāgataṃ āyasmantaṃ Ānandaṃ dhārema ‘āyasmā Ānando atthakusalo dhammakusalo vyañjanakusalo niruttikusalo pubbāparakusalo’ ti. A. III. 201)

「私は語源において巧みであり、意味無意味に通じ、知らないものはなく、師の教えに専念しております」「語にも随語にも、また字にも文にも序にも結びにも、すべてに亘って私は通暁しているのです」(riruttiyā ca kusalo atthānatthe ca kovido anaññātaṃ mayā n’atthi ekaggo satthusāsane. Ap. 43 [No. 82]; padaṃ anupadañ cāpi akkharañ cāpi vyañjanaṃ nidāne pariyoṣāne sabbattha kovido ahaṃ. Ap. 43 [No. 84])

「五法を顕示するために、文、語源、語法がある。五の意味を顕示するために文、語源、語法がある。法の語源と意味の語源とは別である」(pañca dhamme sandassetuṃ byañjananiruttābhilāpā, pañc’ atthe sandassetuṃ byañjananiruttābhilāpā; aññā dhammaniruttiyo, aññā atthaniruttiyo. Paṭis. I. 88. cf. I. 150)

ここに我々は、少くとも以上の数例から akkhara, pada, vyañjana, ākāra, nirutti が、そして又、経典の中に *Niddesa* なる独立の経があることなどによって *niddesa* も使用された、要するに「六形式語」すべてをもって法が説かれ分別されていた様子だけは知ることができるのである。

それに対し、「内容語」についてはどうか。これは仏陀、並びに仏弟子がどのように表現していたかということで、次のような例がその内容を示してくれよう。

「比丘たちよ、如来、阿羅漢、正等覚者によって、ベナレスの仙人墮処鹿野苑において無上の法輪が転ぜられた。沙門によってもバラモンによっても天によっても魔によっても梵天によっても、或いは又、世界のいかなるものによっても未だかつて転ぜられたことはないのだ。即ちそれは四聖諦の開示、宣説、施設、建立、解明、分別、闡明である」(tathāgatena, bhikkhave, arahatā sammāsambuddhena Bārāṇasiyam Isipatane migadāye anuttaram dhammacakkam pavattitam appativattiyam samaṇena vā brāhmaṇena vā devena vā mārena vā Brahmuna vā kenaci vā lokasmiṃ yadidaṃ catunnaṃ ariyasaccānaṃ ācikkhanā desanā paññāpanā paṭṭhapanā vivaraṇā vibhajanā uttānikammaṃ. M. III. 248)

「比丘たちよ、ここに人がおり、他の人と共に論議してこのように知る。

即ちこの尊者が提示したところに従えば、又、作り方に従えば、更に質問の仕方によれば、この尊者は智慧をそなえている。この尊者は劣慧者ではない。それは何故か。この尊者は甚深にして寂静の、勝れた、思慮分別を超えた、聡敏な智者の知るべき意味語を説き、又、この尊者はいかなる法を説くにも、よく略したり、詳細にしたりして意味を開示し、宣説し、施設し、建立し、解明し、分別し、闡明することができる智慧をそなえているからである。この尊者は劣慧者ではないのだ」(idha bhikkhave puggalo puggalena saddhim sākacchāyamāno evaṃ jānāti: yathā kho imassa āyasmato ummaggo yathā ca abhinīhāro yathā ca pañhasamudācāro pañña-ā ayam āyasmā nāyam āyasmā duppaññā. taṃ kissa hetu. tathā hi ayam āyasmā gambhīraṃ atthapadam udāharati santaṃ paṇītam atakkāvacaram nipuṇam paṇḍita-vedanīyam, yañ ca ayam āyasmā dhammam bhāsati tassa ca paṭibalo saṅkhattena vā vitthārena vā attham ācikkhitum desetum paññāpetum paṭṭhāpetum vivaritum vibhajitum uttānikātum, pañña-ā ayam āyasmā nāyam āyasmā duppañño. A. II. 189)

「語り給え〔とは〕、開示し、宣説し、施設し、建立し、解明し、分別し、闡明し、表明し給え〔という意味である〕」(brūhi ācikkha desehi paññāpehi paṭṭhāpehi vivara vibhaja uttānikarohi pakāsehi. *Nid* I. 140)

これらの例から仏陀或いは仏弟子がどのように法を示したかがかなり明らかになる。我々はここに、「開示 (ācikkhanā), 宣説 (desanā), 施設 (paññāpanā), 建立 (paṭṭhapanā), 解明 (vivarāṇā), 分別 (vibajanā), 闡明 (uttānikamma)」という原始仏教における表現の一つのパターンを見るのであり、したがって又、*Nett.* に示された「六内容語」のうち、少なくとも四項についてはこれを仏典に辿りうる。このパターンは仏典の常套語ではあっても、単なる「説示」のシノニムと考えるべきものではない。更に又、次のような例がある。

「比丘たちよ、世に次の四人がいる。即ち、略説知者、広説知者、所引導者、語句最上者である」(cattāro' me bhikkhave puggalā santo saṃvijjamānā lokasmim. katame cattāro. ugghaṭitaññū, vipacitaññū, neyyo, padaparamo. A. II. 135)

このうち初めの三は *Nett.* に説かれている ugghaṭitaññupuggala, vipaṇcitaññup°, neyya-p° に等しい。*Nett.* は明らかにこれをふまえたのである。又、この『増支部』の所説は、更に『人施設論』に結ばれ、ここで展開されていることが知られる。即ち次の通り。

「略説知者とは何か。即ち、説かれると同時に法の現観がある者、彼を略説知者という。広説知者とは何か。即ち、略説されたものに意味が詳しく説かれた時に法の現観がある者、彼を広説知者という。所引導者とは何か。即ち、

示され、問われ、根本よりよく考え、善知識に仕え、親近し、訪ねて、序々に法の現観がある者、彼を所引導者という。語句最上者とは何か。即ち、どのように多くを聞いても、多くを話されても、多くを受持しても、多くを語られても、その生存中には法の現観がない者、彼を語句最上者という」(katamo ca puggalo ugghaṭitaññū. yassa puggalassa saha udāhaṭavelāya dhammābhisamayo hoti, ayaṃ vuccati puggalo ugghaṭitaññū. katamo ca puggalo vipaccitaññū. yassa puggalassa saṅkhittena bhāsitassa vitthārena ātthe vibhajiyamāne dhammābhisamayo hoti, ayaṃ vucatti puggalo vipaccitaññū. katamo ca puggalo neyyo. yassa puggalassa uddesato paripucchato yoniso manasikaroto kalyāṇamitte sevato bhajato payirupāsato evaṃ anupubbena dhammābhisamayo hoti, ayaṃ vuccati puggalo neyyo. katamo ca puggalo padaparamo. yassa puggalassa bahum pi suṇato bahum pi bhaṇato bahum pi dhārayato bahum pi vācayato na tāya jātiyā dhammābhisamayo hoti, ayaṃ vuccati puggalo padaparamo. Pug. 41, Mp. III. 131)

このように見てゆくと、*Nett.* が立てた ugghaṭanā, vipañcanā, vitthāraṇā も、明らかに仏典の中にその原形を見出すことができるのである。

VI

以上、我々は仏典における表現法 (vyañjanapada・atthapada) を *Nett.* の所説を中心として考察した。これより、仏教当初から説法のために「表現」が特に「形式」と「内容」という二つの基本的観点から意識され考慮されていたことを窺いうる。そしてそれが具体的にどのような内容のものであったかということも或る程度迄、つまり、略説され凝縮された内容の濃い教説を機根に依じて次第に分別し、それを理解させて行こうとする段階があり、そのために手段としての言葉も選ばれているということを知ることができる。しかしながら *Nett.* に説くような組織立った表現法は仏典には見出しえない。

ここに扱った「形式の方法」「内容の六法」という表現のパターンは、少なくともパーリ語文献にその跡を辿る限り、たとえ仏典にその原形が見出しうるとしても、我々は時代的に三蔵とその註釈 (aṭṭhakathā) との中間に属する *Nett.* 又は *Pet.* に帰せざるを得ない³⁴⁾ように思われる。孰れにしてもこの「表現法」は九分十二分教における特に「経」(sutta) の「分別」に関係するものであるが、それとは別個に仏典全体について考えらるべきものである。

註

* 以下に使用する略号は *Critical Pāli Dictionary* のそれに準ずるものである。

- 1) 前田慧学『原始仏教聖典の成立史研究』(1964) p. 181 f.
- 2) Ñāṇamoli : *The Guide*, PTS 1962, P. vii
- 3) 水野弘元「*Peṭakopadesa* について」(『印度学仏教学研究』第14号) 参照。「*Nett.* は経典解釈の指導書, 又は経典説による理想解脱への指導書とも云うべきものであり, *Pet.* は蔵論 (*Peṭaka*) の註釈書 (*upadesa*) とも云うべく, 蔵論とは三蔵書, 三蔵特に経典に対する見方を述べた文献である」と。又, Ñāṇamoli は, 前掲書の序において, *Nett.* は註釈書ではなくて, 註釈書に註釈の基準を与えることをめざす書であるという。尚, 佐藤良純「*Nettipakarāṇa* における引用文献」(『大正大学研究紀要』第55輯) 参照。
- 4) *Saddaniti, la grammaire Palie d' Aggavaṃsa*, par H. Smith, Lund 1930, p. 906
- 5) *Ibid.* p. 907 因みに, この *atthapada* について対照すれば, 次の通り。これより, 三蔵, 蔵外, 註釈を通して, その名称に動きが見られぬものは, *vivaraṇa*, *vibhajana*, *uttānikaraṇa* であることがわかる。この三語が「分別」の内容を最もよく表わすものであると考えるべきか。

ATTHAPADA

<i>Sadd.</i>	<i>Nett.</i> 8	<i>Pet.</i> 5	(<i>Pet.</i> 1)	<i>Sp.</i> I. 127 <i>Vism.</i> 214 <i>UdA.</i> 9	<i>M.</i> III. 248
saṅkāsanā	saṅkāsanā	saṅkāsanā	(desanā)	saṅkāsaṇa	² desanā
pakāsanā	pakāsanā	pakāsanā	(sandassanā)	pakāsaṇa	⁴ paṭṭhapanā
vivaraṇa	vivaraṇā	vivaraṇā	(vivaraṇā)	vivaraṇa	⁵ vivaraṇā
vibhajana	vibhajanā	vibhajanā	(vibhajanā)	vibhajana	⁶ vibhajanā
uttānikaraṇa	uttānikamma	uttānikammataṅga	(uttānikriyā)	uttānikaraṇa	⁷ uttānikamma
paññatti	paññatti	paññāpanā	(pakāsanā)	paññatti	³ paññāpanā ¹ ācikkhanā

(数字は列挙順)

- 6) 「六形式語」「六内容語」を「形式の六法」(*vyañjanachakka*)「内容の六法」(*atthachakka*)ともいう (*Sadd.* 907)。これらに対して, *Sp.* I. 127, *Vism.* 214 では「有文」(*sabyañjana*)「有義」(*sāttha*)という三蔵で使用される表現を採り, 次のように説明する。

“*sāttham* *sabyañjanam* ti evamādisu pana yassmā imam dhammam desento sāsanabrahmacariyam maggabrahmacariyaṅ ca pakāseti nānāyehi dīpeti, taṅ ca yathānurūpaṃ atthasampattiyā *sāttham*, byañjanasampattiyā *sabyañjanam*, saṅkāsanapakāsanavivaraṇavibhajanauttānikaraṇapaññattiatthapadasamāyo gato *sāttham*, akkharapadavyañjanākāraniruttiniddesasampattiyā *sabyañjanam*, atthagambhīratāpaṭivedhagambhīratāhi *sāttham*, dhammagambhīratādesanāgambhīratāhi *sabyañjanam*, atthapaṭibāṇapaṭisambhidāvisayato *sāttham*, dhammaniru-

ttipatisambhidāvisayato *sabyañjanam*, paṇḍitavedanīyato parikkhakajanappasā-dakakan ti *sāttham*, saddheyyato lokiyajanappasādakan ti *sabyañjanam*, gambhīrādhippāyato *sāttham*, uttānapadato *sabyañjanam*,”

尚、ここでいう *attha*, *vyañjana*, *pada* については *Ñāṇamoli: The Guide*, p. xxxiv 参照。

7) *Sadd.* 906~912

8) “akkhara” (Ved. a-kṣara) = imperishable; constant, letter, sound, word. cf. *NettA* [*Nett.* 209] “keci pana manasā-desanā-vācāya akkharāṇato akkharan ti”

9) cf. *S.* I. 38, *Ap.* 43 ところが、以上の所説に対し、文法家 (akkharacintaka) たちの考えでは「akkhara」を a とか、k とかといった字を呼ぶ術語として使用する。又、世間一般の概念では、mahāsammato t’eva paṭhamam akkharam upanibbattam “大称讃という最初の akkhara が生じた” (*D.* III. 93 cf. *As.* 390) とか *vyañjanam* *sobhaṇam* akkharattho asobhaṇo “文は修飾であり、akkhara の意味は非修飾である” (*Sadd.* 910 cf. *Ja.* II.108) というように、語 (*pada*) として意味を表わす音の総体 (*vaṇṇasamudāya*) と見られている。

10) “pada” (Ved. pād, pāda, pada) = foot, step, way; case, word, term; verse; stanza; line; sentence. cf. *NettA* [*Nett.* 209] “pajjati attho etenā ti padam. tam nāmapadam, ākhyāta-p°, upasagga-p°, nipāta-p° ti catubbidham”, *Vin.* V. 176

11) cf. *A.* II. 189, *Ap.* 43

12) “vyañjana” (or *byañjana*) <vi-√añj, = attribute; sign, letter, phrase condiment. cf. *NettA* [*Nett.* 209] “saṅkepatto vuttam: padābhihitam attham byañjanati ti;

13) cf. *Ap.* 43, *As.* 391 (*vyañjanan* ti *nāmavyañjanam*. *yasmā* *pan’etaṃ attham vyañjati* *tasmā* *evam* *vuttam*). 以上の所説に対し、文法家たちの考えでは、a 字 (*kāra*) などの純母音を除く、母音を伴わない k 字などのそれぞれの音 (*vaṇṇa*), いわゆる子音を指している。又、経典の正法に通じた者 (*pāvācanika-saddhamma* *vidū*) は、次のように十種に分類して言う。 *sithila-dhanitaṅ ca dīgha-rassam lahukagarukaṅ ca niggaḥitam sambaddham vavatthitam vimuttam dasadhā vyañjanavuddhiyā pabhedo* (*Sv.* I. 177).

14) “ākāra” <ā-√kr, = state, property, sign, mood, way; mode, reason

15) “nirutti” (Skt. *nirukti*) <nis-√vac, = one of the *Vedāngas*, grammatical analysis, etymological interpretation, linguistic, expression. cf. *NettA.* [*Nett.* 209] “ākārābhihitam nibbacaṇam niruttam”

16) cf. *Ap.* 43; 502, *As.* 310, *Dīghanikāya-atthakathā-tikā.* II. 140 (*taṃ taṃ atthappakāsane nicchitam, niyatam vā vacanam nirutti*). *Sadd.* 911 に引用するパーリ語文法 *Niruttipitaka* (これについては拙稿「*Nirutti* 類について」印仏研, 第20巻第2号参照) は, *nirutti* を *Dhs.* 226 (No. 1307), *Nid* I. 140 などに基づいて, 名称 (*saṅkhā*), 通称 (*samaññā*), 概念 (*paññatti*), 慣用語 (*vohāra*) / 名 (*nāma*), 命名 (*nāmakamma*), 授名 (*nāmadheyya*) / 語源 (*nirutti*), 文 (*vyañjana*), 語法 (*abhiḥāra*) という十種をもって見る。尚, *Mil.* 424 は, *nirutti* の無礙解について

は, nirutti, pada, anupada, akkhara, sandhi, byañjana, anubyañjana, vaṇṇa, sara, paññatti, vohāra をもって述べるとし, 又, 小部經典のうち論書的性格の『無礙解道』(*Paṭis.* I. 119~120) は nirutti の無礙解智として種々相 (nirutti-nānattha), 決定 (n^o-vavatthāna), 觀察 (n^o-sallakkhaṇa), 近察 (n^o-upalakkhaṇa), 分別 (n^o-pabheda), 開顯 (n^o-pabhāvana), 説明 (n^o-jotana), 遍照 (n^o-virocana), 表明 (n^o-pakāsaṇa) という九種における智を掲げている。

- 17) “niddeśa” (Skt. nirdeśa) <nir- √diś, = discription, demonstration, analytic explanation by way of question & answer; exegesis, *Niddeśa*. cf. *NettA* [*Nett.* 209] “nibbacanavittthāro niravasesadesanattā niddeso, padehi vākyassa vibhāgo ākāro”
- 18) “saṅkāsanā” (or °na) sam- √kāś, = explaining, explanation, illustration. cf. *NettA* [*Nett.* 209] “saṅkhittena kāsanā”
- 19) cf. *A.* I. 56~57
- 20) この一文の直前に「世尊よ, どうか私のために略して法をお説き下さいますように (saṅkhittena dhammaṃ desetu)」という文をもつ。
- 21) “pakāsanā” <pra- √kāś, = displaying, explanation, information. cf. *NettA* [*Nett.* 209] “paṭhamam kāsanā, kāsiyati dīpiyatī ti”
- 22) cf. *S.* II. 36 (ekena padena sabbo attho vutto)
- 23) “vivarāṇa” <vi- √vṛ, = divalging, uncovering; revelation, opening, explanation cf. *NettA* [*Nett.* 210] “vitthāraṇā”
- 24) “vibhajana” (or °nā) <vi- √bhaj, = analysing, distinction, going into detail. cf. *NettA* [*Nett.* 210] “vibhāgakaraṇam”
- 25) “uttānīkaraṇa” (or -kamma, -kiriya, -kammata) <uttāna + √kr (BSk. uttānīkaroti), = exhibiting, declaration; manifestation. cf. *NettA* [*Nett.* 210] “pākatakarāṇam”
- 26) “paññatti” (Skt. prajñapti) <pra- √jñā, = describing, manifestation; description; name; concept. cf. *NettA* [*Nett.* 210] “pakārehi ñāpanam”, *Sv-ṭīkā* II. 140. *Dhs.* § 1308 では註 16) で掲げた十法をも paññatti という。
- 27) *Nett.* 8. cf. *Sadd.* 909~910
- 28) ugghaṭitaññū, vipañcitaññū, neyya については *PugA* [*Pug.* 222~223], *Sv-ṭīkā* II. 83~84, 及び本稿 (V) 参照。
- 29) cf. *Sv.* I. 176~177
- 30) cf. *Sv.* I. 175~176
- 31) この一文は仏典にしぼしぼ見られるもので, 仏が「自ら示す」という形 (e.g. *D.* I. 62, *M.* III. 280, *It.* 79, *Sn.* p. 103) で表現されたり, 或いは, 仏が比丘に「示せ」(desetha, pakāsetha) という形 (e. g. *Vin.* I. 21, *D.* II. 48, *It.* 111) で表わされている。
- 32) 前田慧学, 前掲書 p. 264 註 (67) 参照。
- 33) 前田慧学, 前掲書 p. 252f. 参照。

34) 本稿に引用した A. III. 201 の「五善巧」について、*Sadd.* 912 は「註釈 (aṭṭhakathā) に巧みなものは意味の善巧者 (attha kusala), パーリ仏典 (Pāli) に巧みなものは法の善巧者 (dhamma-k°), 語の分析 (niruttivacana) に巧みなものは語源の善巧者 (nirutti-k°), 字の分類 (akkharabheda) に巧みなものは文の善巧者 (vyañjana-k°) である」と解釈しているが、これによって、最初の attha-k° の attha を次の Pāli に対する aṭṭhakathā と解するならば、三蔵成立の時代に既に aṭṭhakathā があつたとも予想されよう。教説に対する解釈はむろん最初期より行われていたには違いないが、果して後の aṭṭhakathā のような纏まったものが存在したかどうか。もし、存在したと考えるならば、*UdA.* とか *Sp.* などの aṭṭhakathā に見られる「六形式語」「六内容語」が *Nett.* のそれに先行しかねないことになるであろう。又、aṭṭhakathā のこの箇所が元のいわゆる *Siṃhala*aṭṭhakathā に基づいているとするならば、やはりここでも時代的に問題が生じることになる。このように考えると、「表現法」というものがいつ頃纏められたものであるかということは、にわかに決定し難いように思われる。